

グリムケ姉妹—— アメリカ奴隷制廃止運動から生まれた女権理論

谷 中 寿 子

はじめに

アメリカにおけるフェミニズムの起源をどこに求めるかについては、さまざまな説がある⁽¹⁾。しかし1830年代の改革運動、とくに奴隷制廃止運動で活躍し、女権に目覚めた女性が19世紀半ばからの女権運動の指導者となったという点は、誰しも認めている事実である。

この奴隷制廃止運動出身の女権提唱者の中に、南部出身のサラ、およびアンジェリナ・グリムケがいるが、本稿はグリムケ姉妹の女権運動家としての思想、そして当時の人びとの彼女たちへの反応を観察することによって、グリムケ姉妹をアメリカのフェミニズム運動の中で位置づけ、また、今日のニューフェミニズムの視点から再評価しようとする試みである⁽²⁾。

1. 女権への目覚め

グリムケ姉妹の生いたちをみてみると、チャールストンで過ごした娘時代に、彼女たちが女権を意識していたと思われる記録は何一つない。グリムケ姉妹の育った上流南部の家父長制社会は、娘たちには将来大農園の妻になるための女らしい教養と家事能力をつける教育のみ許し、妻、娘を家長の財産の一部であると看做す保守的環境であった。サラもアンジェリナもこのような女性に対するビクトリア的価値観に少々不満を感じてはいたが、北部脱出の時期まで両親の勧めに従い、チャールストン社交界に順応していた。事実、アンジェリナは友人ジェーン・スミスへの1837年8月10日付けの手紙の中で、「私はごく最近まで、女性は男性に従属していると、心から信じてました。」と書いている⁽³⁾。

娘時代まったく女権など念頭になかったグリムケ姉妹が初めて女権について主張し始めたのは、1837年5月、ニューヨークで開かれた全国アメリカ婦人奴隷制反対協会の大会の時であった。この期間中、グリムケ姉妹はボストンからの奴隷制廃止論者で、もうすでに女権を提唱し始めていたリディア・マリア・チャイルド、メアリー・パーカー、マリア・チャプマン、アン・ウェストンと接し、かなり強い影響を受けた⁽⁴⁾。友人キャサリン・バーニーの証言によると、娘時代女ゆえに高等教育を受けることを許されなかった経験を持ち、しかも、鋭敏で繊細な性格で、悩める

者、弱き者にたちどころに共鳴してしまう姉サラの方が、アンジェリナよりも女性の置かれている隷属状態を早期に意識し始め、何らかの組織だった行動を起こす必要性を感じたということである⁵⁾。

グリムケ姉妹がこの時期に女権について急に主張し始めたわけだが、その下地は十分にできていた。1836年11月「奴隷制反対の使徒」に選ばれて以来、彼女たちはニューヨークを中心に、小さい頃から身近に知っている奴隷の状態について精力的に講演し続けていた。その一年間に、グリムケ姉妹は、北部女性があまりにも奴隷制問題に無関心であるのに驚き、そして、女性でも請願運動を起こしたり、あるいは、夫、父親、息子に助言を与えたりして、奴隷制問題に積極的に介入すべきであると勧めていた。

奴隷制廃止運動への女性の参加呼びかけから、女権問題へと論を進めたのが、1837年の大会のために書かれたアンジェリナの『名ばかりの自由諸州に住む婦人たちへの訴え』(*An Appeal to the Women of the Nominally Free States*)というパンフレットの中においてである。アンジェリナは「奴隷制問題は政治的問題だから、女性が口出しする権利はない。」と言われていることに対して、次のように書いている。「すべての市民は、この国の政治的事柄に強い関心を持つべきであり……あらゆる知的な女性は、この重要な問題(奴隷制)に無知であってはならないし、あらゆる女性キリスト教徒は、女性に課せられた義務、つまり、奴隷性問題を自ら検討する義務から逃れることはできない。……(女性が)奴隷制問題のために行動する義務を否定されることは、行動する権利を否定されることである。もし私たち女性が行動する権利を持っていないならば、私たちは『北部の白人奴隷』と名付けられるだろう。なぜなら、鎖に繋がれている私たちの同胞と同じように、私たちは絶望と沈黙の中で口を封じねばならないのだから。……女性は、黒人のみじめな状態に特別な共鳴を感じざるべきである。なぜなら、黒人と同じように、女性は知的に劣っていると非難され、教育を受ける権利も拒否されているからである。』⁶⁾ここでアンジェリナが明確に打ち出した理論は、女性の行動する権利の要求と、黒人と女性の置かれている状態の類似である。黒人のために戦っている彼女たちは、奴隷が奴隷所有者から解放されるように、女性も男性から解放されねばならないと気付いたのである。

さらに、アンジェリナは、このパンフレットの中で、古代ローマの時代から彼女の時代まで、「女性は市民であり、国のために重要な義務を果たしている」ことを、ジャンヌダルクや、アメリカ独立革命軍に貢献したリディア・ダラの例などを掲げて例証している⁷⁾。このようなすぐれた資質を持ちながら、奴隷と同じような隷属状態に置かれているために、政治的問題に口出しすることを男性から禁止され、奴隷制廃止運動に参加できない女性に対し、行動を起こすようにと、アンジェリナ・グリムケはこのパンフレットで訴えたのである。

2. グリムケ姉妹の女権論への非難と中傷

1837年5月の全国アメリカ婦人奴隷制反対協会の大会以後、グリムケ姉妹には、各地から講演依頼の申し込みが殺到した。彼女たちは、奴隷制廃止運動のための講演者として、ニューイングランドの町から町へと旅した。どの会場へも、男性も女性も大勢押しかけ、大盛況であった。

このような大成功にもかかわらず、あるいは、それゆえに、グリムケ姉妹の講演活動に対して非難、中傷が強まった。第一の批判者はキャサリン・ビーチャーであった。ビーチャーは『アンクルトムの小屋』の作者、ハリエット・ビーチャー・ストウ夫人の姉にあたり、ハートフォード女子学院の校長を務め、女性の高等教育向上の推進者であった。この点では革新的なビーチャーだが、奴隷制問題については植民地協会を支持し、穏健な立場をとっていた。グリムケ姉妹が女性の積極的参加を呼びかけながら即時奴隷制廃止を提唱していることへの批判として、ビーチャーは、『奴隷制と奴隷制廃止運動についての論文——アメリカ婦人の義務との関連』(*An Essay on Slavery and Abolitionism, with reference to the duty of American females*)というパンフレットを、アンジェリナ当ての手紙の形式で出版した⁸⁾。

ビーチャーはこのパンフレットの中で、女性の地位に関して次のように規定している。この社会は、両親と子供、先生と生徒、主人と使用人の関係で見られるように、一方は優越 (*superiority*)、他方は服従 (*subordination*) という関係で成立している。男女の関係もこの範疇に入る。だから女性は家庭内や社交界で、男性に意見を述べて影響を及ぼせばよい⁹⁾。「男性が(政治)指導者に訴えるべきであり……女性が抑圧されている女性のために請願することは適当でないし、賢く、正しいことではない。」¹⁰⁾そしてグリムケ姉妹の行為を暗に非難して、「現在女性が野心を抱いて、権力を求め……本来の適切な立場から離れ(そのために)暴徒の暴力や、公衆の場での冷笑とあざけりに身をさらしている。」と書いている¹¹⁾。

ビーチャーと同じような考え方から、当時の改革運動に参加していた女性改革者たちはグリムケ姉妹の女権論を支持しなかった。ニューヨーク婦人道德改革協会の機関紙『道德改革の主唱者』(*Advocate of Moral Reform*)には、家庭内における女性の宗教的、道徳的役割から飛び出し、男性の活動領域に入っていったグリムケ姉妹を非難する数多くの投書が寄せられた。伝統的価値を捨てず体制内における改革を目指していたこれらの保守的な改革者にとって、グリムケの主張はあまりにも急進的すぎ、受け入れがたいものであった¹²⁾。

グリムケ姉妹への第二の批判者は教会の牧師たちだった。1837年6月28日、マサチューセッツ州会衆派教会の牧師総会で、グリムケ姉妹の行為を非難し、各地の同派教会に『牧師の書簡』("Pastoral Letter of the General Association of Congregational Churches of Massachusetts")を配布するとの決議がなされた。この書簡の第一の要点は、「現在われわれの共通の

問題となっているあの煽動的な困った問題（奴隷制廃止問題）は、教会員の間で疎外と分裂を引き起こす危険があるので、教会で討論すべきことではない。」と明記されているように、奴隷制廃止運動の演説会場として教会を使用することの禁止を徹底させることであった⁴³。ほとんどのニューイングランドの教会は以前から植民地協会を支持していたので、「即時奴隷制廃止」を唱え、しかも痛烈な教会批判をしていたウィリアム・ギャリソンに共鳴するグリムケ姉妹に教会を提供したり、彼女たちの演説の日時を教会員に知らせることは、混乱を招くものと考えられていた。

さらに牧師たちは、「牧師が同意しない問題について」とくに奴隷制の善悪を論じるという道徳的判断がからんでいる事柄について「俗人が説教すること」は、「牧師の神聖で重要な権利を侵害する」ことであると警告した⁴⁴。彼らは、教会員に「尊敬と服従」の関係を要求していたので、グリムケ姉妹は教会牧師の神聖な立場、その権威を脅かす存在となっていた。

書簡の第二の要点は、グリムケ姉妹の講演活動が当時定められていた女らしい行動から逸脱していることへの警告、非難であった。書簡を書いた牧師たちの女性観は次の言葉で示されている。「女性に適した義務と影響力は、新約聖書の中にはっきりと述べられている。それは、出しゃばらない、私的なものである、……女性の力は（男性に）依存することから出る。男性に保護してもらうようにと、神が女性に与えたか弱さを、自ら意識することにより生ずる。……それなのに、女性改革者として、男性の地位と性格を身につけたら、女性に対するわれわれの配慮と保護は不必要となり……女性の性格は不自然になる。」それゆえ、牧師たちは、「女性に改革運動で出しゃばった役割を担うように煽動したり、公開講演会の講師や教師として、遊説して廻っている身のほど知らず」のグリムケ姉妹の行動を誹謗したのであった⁴⁵。

この『牧師の書簡』は一般新聞にも印刷され、その反響は大きかった。この書簡の勧告に従う教会が圧倒的に多く、グリムケ姉妹はこの書簡の後には、演説会場探しに苦勞した。また、教会がグリムケ姉妹を非難したことにより、ギャリソンと教会の対立は一層深まり、『リベレーター』(*The Liberator*)には、『書簡』についての論争が掲載され、この問題はやがて、奴隷制廃止運動の分裂へと発展するのであった⁴⁶。

グリムケ姉妹への第三の攻撃者は、彼女たちが同志と思っていた奴隷制廃止運動で活躍していた人びとであった。アメリカ奴隷制反対協会の指導者たちは、グリムケ姉妹が女性だけを対象にして演説し、各地で奴隷制廃止論者を多数動員していた1836年末から1837年初めにかけては、彼女たちを大いに誉め称え利用した。しかし協会のマサチューセッツ代表アモス・フェルプスからの手紙からもわかるように、グリムケ姉妹が男女両性の前で講演し始め、女権について書き始めた頃から、彼女たちが巻き起こす騒動が奴隷制廃止運動の効果を妨げるのではないかと恐れ始め、講演の対象を女性に限るように勧告した⁴⁷。

奴隷制反対協会がグリムケ姉妹を重荷と感じ始め、世間のグリムケ非難と協会は無関係という無責任な態度をとり始めたことは、セオドア・ウェルドのグリムケ姉妹への次の手紙からも明らかである。「(協会の) 執行委員会は、男女が出席している集会で講演しているあなたがたを是認していない。……あなたがたと執行委員会の関係は……(協会の) 当局とか、代表とかではなく、むしろ、共通の目的のための共通の任務・喜び、試練を持ち、一致した見解や感情を認識しあう一種の協力関係である。……一般の人びと、そして男性に話しかけているあなたがたに反対する人びとがいても、その人たちは奴隷制廃止論者に対して反駁しているのではない……。」^[88]

詩人であり奴隷制廃止論者でもあったグリーンリーフ・ホイットィアは、グリムケ姉妹の活動開始当時から友人であったが、彼は、男女両方の前で女性が演説することには反対しなかった。しかし、ホイットィアはグリムケ姉妹へ友情あふれた手紙を送り、グリムケ姉妹が女権問題に直接介入することには反対であると忠告した。「あなたがたは、女性の権利を擁護、主張するために、多くのことを立派に成就しつつある。……大勢の男女の前でのあなたがたの講演は、人類の幸福と救いのために男性と肩を並べて活躍するという女性の権利と義務を実践するものであり、またそのことを力強く主張することである。それだからといって、論争的になっている(女権)問題に、あなたがたが口を出す必要があるだろうか。そうすることは気の毒なみじめな奴隷のための運動を、ある程度捨てることにならないだろうか。」^[89]

後にアンジェリナと結婚した奴隷制廃止論者セオドア・ウェルドもホイットィアと同じ考え方であった。ウェルドのアンジェリナ当ての手紙によると、彼は女性が精神的、知的に男性に劣るとは考えておらず、「女性に資格さえあれば、法律を作ったり、裁判官になったり、議員になったり、弁護士になったり、教会牧師になったりしてはいけない理由はない。」とまず述べ、「それにもかかわらず、私(ウェルド)はあなたがたがパンフレットで女権についてふれ始めたことを嘆いている。」^[90] ウェルドが何通かの手紙で強調していることは、グリムケ姉妹は「南部人なのだから、チャイルド夫人やチャプマン夫人(北部出身の奴隷制廃止運動家)よりも10倍も効果的に奴隷制問題の役にたつことができる……20人の北部の女性が語るより説得力がある。……女性の権利を唱えることは、どんな女性にでもできる……他の誰かにできるようなあまり重要でない仕事は他の者に任せ、あなたがたの肉体と精神の全部を、あなたが誰よりも効果的に行える……より偉大な仕事(奴隷制問題)に集中しなさい。」ということである^[91]。

ウェルドは「まず何百万人もの奴隷を屈辱の境遇から引き上げるように人びとに目覚めさせ…(そうすれば) 跪いている何百万人もの女性を彼女らの足で立ち上がらせ、別な言い方をすれば、赤ん坊から女性へと変えることはたやすいことだ。」と述べているように、奴隷解放が成就すれば、女性問題にも影響するだろうという考え方であったので、奴隷制廃止を第一の目的にするように勧告したのである^[92]。

以上のように、多くの奴隷制廃止運動家がグリムケ姉妹が女権問題を奴隷制問題と結びつけたことに批判を加えたが、例外もいた。それは、ウィリアム・ギャリソンと彼を尊敬するヘンリー・C・ライトらギャリソン派の人びとであった。ギャリソンは女権の主張を支持していた。ヘンリー・ライトへの手紙の中でアンジェリナは、「(ギャリソンが) 女性の権利の問題について、私たちと強く結びついているので心強い……彼の口から、確認(の言葉)を聞くことはうれしいことだ。」と書いている⁹⁴。

3. 女権論の確立

グリムケ姉妹は女権について書き始めたことに対して各方面から厳しい批判を受けるとは予想もしていなかった。ウェルドへの手紙の中で、アンジェリナは「私たちは本当に思いがけなく、まったく新しい論争、つまり、道徳的、知的、責任のある人間としての女性の権利のための論争の最前線に立たされ、非常に苦しい状況に置かれている。」と書き送っている⁹⁵。とくに奴隷制廃止運動家からの非難は身にこたえたようである。ウェルドへの別の手紙に、アンジェリナは女権問題という「目立つ問題」を彼女たちが扱っていることに対して、「私は適任の立場にいるのだろうか。そしてふさわしい仕事をしているのかという疑問がわいてくる。(奴隷制廃止運動の) 仲間からのこれらすべての疑念や不平は、全然予想もしていなかったもので、私はそれにどのように耐えたらよいかかわからない。私の唯一のなぐさめは、この問題によって導き、支えてくれる神にさらに近づけるといふ希望があることだ。」と述べている⁹⁶。

しかし、グリムケ姉妹は、ひとたび女権問題について意見を発表した後は、いかなる批判、嫌がらせにもひるまず、直ちにその批判者に反論を送った。その反論を迎ってみると、彼女ら独得の女権論の具体的内容がよくわかる。

まずアンジェリナはキャサリン・ビーチャーから批判を受けた時、友人ジェーン・スミスに「キャサリンの議論は、私が今までに読んだもののうちで、もっとも陰険なものだ。そして私は、彼女からの手紙に答える義務があると思う。ただし、女性の性格や義務に関するキャサリンの意見に対して私の憤りを表わすのに足る十分に強い言葉をどのように見つけたらよいかかわからない。」と書き送り、ビーチャーと対決する気構えを示している⁹⁷。

アンジェリナのビーチャーへの反論は、1837年6月12日の『リベレーター』への『キャサリン・ビーチャーへの手紙』(*Letters to Catherine E. Beecher*) と題する投稿記事によって始まり、同年10月23日まで13回続けられた。翌年、これが本としてまとめられ、出版された。この中でアンジェリナは、ビーチャーが支持する植民地協会を批判し、なぜギャリソンの唱える即時奴隷制廃止が必要なのか、なぜ彼女たちが、北部で奴隷制廃止運動のために働いているのか、そして、ビーチャーが人種偏見を持っていることを指摘し、黒人をどう見るべきかなどの問題について、

ビーチャーの論をことごとく反駁した。とくに「手紙11—道徳的人間としての女性と男性の活動領域は同じ」(Letter XI. The Sphere of Woman and Man as Moral Beings the Same.)と「手紙12—性を根拠としない人間の権利」(Letter XII. Human Rights not Founded on Sex.)において、女性問題を取り上げ、ビーチャー論を否定している。

ここでアンジェリナが主張することは男女同権論である。アンジェリナによれば、ビーチャーの女性従属論は「何の証拠もない議論」であり、「女性の権利は男性によって与えられたものではなく、神が授けて下さったもの……権利とは、人間の道徳的な性格に基づいているのだから、単に性の違いによって、男性には女性よりも高い権利と責任が与えられるのではない。……(だから)男性がしてもよい正しいことはすべて、女性がしてもよい道徳的に正しいことなのである。私たちの義務は性の違いから生ずるのではない。」⁹⁷ アンジェリナにとっては、「男性の権利」「女性の権利」と分けることは、まったくばかげたことに思われ、「私は人間の権利以外何の権利も認めない。」と断言している⁹⁸。

このような男女同権論に基づいて、アンジェリナは「男性に適した活動領域は女性にもふさわしいもの」と述べ、彼女たちが奴隷制廃止運動に係り合っているように、政治分野にも女性が参加すべきであると論を進めている⁹⁹。「私は、教会においても、国においても女性が統治される法律や規則に対して発言権を持つべきであると信じる。……私たちは、国のあらゆる場所で……私たち女性を傷つけ、抑圧するかもしれないすべての政策に対して、少なくとも抗議する権利を許されるべきである。この請願する権利は女性が持っている唯一の政治的権利である。女性が虐げられている時に、なぜそれを行使してはいけないのだろうか。」¹⁰⁰ このように、男女は本来同じ活動領域を持っているのだから、女性だって男性と同じようにイギリス国王や、アメリカ大統領になる権利があるとアンジェリナは言い切っている¹⁰¹。

最後の「手紙13—結論」(Letter XIII. Miscellaneous Remarks,—Conclusion.)について、アンジェリナは子育ての問題にふれ、「女性がとくに子供を育てる義務があるようにあなた(ビーチャー)は思っているらしいが、なぜ女性がこの神聖な仕事に対して男性に比べて大きい義務を負うべきか、お聞きしたい。男性は、子供を教育するという崇高な仕事を女性と協力して行う義務がある。男性がそのような無邪気なやさしい心の持主(子供)と接することは、男性の荒々しい性格を和らげ、男性に尊く崇高なキリスト教の徳を身につけさせることになるだろう。」と述べ、性による役割設定を取り除くことを主張している¹⁰²。

アンジェリナがビーチャーへの反論という形で女性論を展開している同時期に、姉サラもボストン婦人奴隷制反対協会会長メアリー・パーカーの勧めで、『女性の領域に関する手紙』(The Province of Woman)をボストン奴隷制反対協会の機関紙『スペクテーター』(Spectator)に送り、女権について論じた。サラの投稿が続いている最中に、『牧師の書簡』が出され、サラは

この書簡をただちに反論した。このサラの女権論および書簡への反論は、1838年『男女同権と女性の地位に関する手紙』(*Letters on the Equality of the Sexes and the Condition of Woman*)というパンフレットになり出版された。

サラはまず当時の人びと、とくに牧師たちが聖書を誤って解釈し、男性優位、女性従属の偏見を作り出していることを指摘し、男女関係に言及している聖書の部分をすべて、サラ独得の考えで解釈し直した。その結果、サラが出した結論は次のようなものである。神は「あらゆる面で男性と平等な連れ(女性)を男性に与えた。つまり女性は男性と同じように知性と不滅の才能を賦与された自由な身の神の代理人である。……男性と女性は平等に造られている。両方とも道徳的で責任感がある生き物である。男性にとって正しいことは女性にとっても正しいことだ。……女性が男性に依存しているという論はなんてばかげていて反キリスト教的だろうか。」⁶⁹

『牧師の書簡』について、サラは聖書を曲解して男性優位論を展開したもっとも途方もないものと看做してはいるが、一方、この書簡のおかげで、多くの女性が女性の置かれている立場に注意を向け始めたことを喜んでいる⁶⁴。さらに『書簡』が女性の社会的活動を禁止させようとしていることへの反論として、サラは女性が従来のように家庭内にだけ留るのではなく、さまざまな改革運動に参加し、困窮状態にいる人びとと混り合い視野を広げることによって道徳の大切さを確認し、家庭内において、母として、妻として立派な役割を担うことが可能になると述べている⁶⁵。サラは女性は『牧師の書簡』などにめげず奮起するように呼びかけている。「女性は現在男性が押しつけた場から立ち上がるように求められている。そして神が女性に与えた神聖で譲ることの出来ない権利を主張すべきだ。」⁶⁶ 男性に対しては「私が男性にお願いしたいことは、私たちの首を押えている足をどかし、神の意図によって女性が占めるように割り当てられた場所に私たちが真すぐ立てるようにさせてくれることだ。」と述べ、書簡を書いた牧師たちのいやがらせを非難した⁶⁷。

サラは、次に宗教的立場から検討した女性の地位から社会一般における女性の地位へと話題を広げ、アジア・アフリカ・ヨーロッパ・アメリカで、さまざまな時代に女性がいかに差別され、抑圧されていたかについて考察している。とくにアメリカ合衆国の女性の地位に関して、「社交界の蝶々」であった自分の経験を述べ、アメリカ女性は、「上べだけの魅力によって男性の注意を引くこと」ばかり熱中し、「結婚が一番大切なことと看做し、夫の家を切り盛りし、夫を快適な状態に置くことが女性の存在する目的である」という「危険なばかげた考えによって育てられ…男性の知的相手としての価値はほとんど無視されている」状態や、「多くの女性が怠惰に浪費するばかりで、夫や父や兄の労働によって養われ……家族を扶養する役割を全く負わず」男性はさまざまな職場で「生計を立てるために苦勞をしいられている」状況を嘆いている⁶⁸。さらに、アメリカの男女労働者の賃金格差、財産権、控訴権など法律上の女性への差別、聖職からの女性し

め出し、女性と服装、女性と税金、女性と刑罰など広範囲に渡って、アメリカ女性の置かれている状況を分析している。

一方、サラは女性は道徳、勇気、知性、才能の面で決して男性に劣っていないことを、さまざまな時代に、多くの女性が政治的要職についた例をあげて証明しようと試み⁴⁹、女性に対し、「男性と同じ平等な働き手として造られていると自覚し……男女の義務を別々のクラスに分けている想像上の線を見つけ出し、……偏見を捨て、男性の伝統にかかわらず、女性自身でこれらの問題を検討する」ように訴えている⁴⁹。

サラの結論は、アンジェリナの主張と同じく、男女は「同じ権利」と「同じ義務」を持ち、その活動領域は全く同じだということである⁴⁹。

奴隷制反対協会の人びとからの批判に対して、グリムケ姉妹は最初ちょっと戸惑いながらも、女性問題に関して彼女たちの主張を撤回するようなことはしなかった。それどころか、協会の執行委員会が彼女らを見捨てるような行為に対して、彼女たちは、「自費で活動している」のだから、「協会に対して何の責任も負ってはず、また協会を頼りにもしていない、」だから協会も彼女らに対する責任を自由に放棄し、その旨を世間に公表してくれと、協会全国執行委員の1人エリザ・ライトに書き送っている⁴⁹。

このグリムケ姉妹の毅然とした態度は、彼女たちから奴隷制廃止運動家への手紙の随所に見られる。サラは1837年8月12日付けのライト当の手紙の中で、女性が男女両方を前にして講演することに対して「私は私たちがとっている立場から、今引き下がるべきではないと信じる。もし引き下がったら、将来もっとむずかしい事態になるだけだ。だから、私は正直に真すぐにこの道を歩み続けます。」と述べている⁴⁹。グリムケ姉妹は彼女たちが、「支配することのできない連鎖によって」女権問題に巻き込まれたが、「それは、神が今が一番良い時期だと定めたにちがいない。」と思っていたのである⁴⁹。

ところでグリムケ姉妹の女権論を見て気づくことは、彼女たちが強烈に女権論を展開しながらも、その女権論を奴隷制廃止問題に優先するものにしようとしなかったということである。女権問題が奴隷制廃止運動を妨害するという批判に対しては、アンジェリナは、「私はこの問題が奴隷制反対問題が解決される前に起こってしまったことを嘆かずにはいられない。それが神聖な運動を害するかもしれないことを恐れている」と、仲間からの批判を認めている⁴⁹。グリムケ姉妹はまた次のようにも書いている。

私たちが今年、大衆に話しかける権利を譲ってしまったら、来年は請願する権利を放棄しなければならない。そして来年は書く権利も。そのように、女性が男性の足の下に置かれ、侮辱され、沈黙させられたら、奴隷のために女性は何ができるのか。……私たちはこの権利（奴隷制問題を討論する権利）を確立しなければならない。もしそうしな

ければ、奴隷解放の仕事をやり続けることは不可能だろう。あなたは、もし女性が拘束されなければ、奴隷のために100倍も働けるだろうし、働くだろうということがわからないのですか。……女性が自分自身で考え、行動する権利を行使すれば、奴隷制反対運動や他の改革運動のために今よりも10倍効果的に働けるだろう。私たちの運動の中で、奴隷が見のがされているなんて誤解しないで下さい⁶⁹。

これは、ウェルドとホイッティア両氏に当てた手紙からの引用であるが、こういう文面からもわかるように、彼女たちはけっして女権問題を奴隷制廃止問題よりも優先させて論じていたのではなく、女権問題ぬきで奴隷制問題にとりくむことは不可能であると言っているのである。それだからこそグリムケ姉妹は、いろいろな機会に女権問題について書きながらも、公けの演説会場では、けっして女権問題について意見を述べるべきではないと考えていたし、そう実行したのであった⁷⁰。このように、女権問題を当面する他の重大な問題の背後においたということは、彼女たちが、後の若い女権運動家と異っていた点であった。

おわりに

グリムケ姉妹の男女同権論は奴隷制廃止運動の中から生まれ、その運動のためのものであった。彼女たちが女権論を展開したのは1830年代であったが、当時の彼女たちは、女権運動が奴隷制廃止運動から独立し、女権運動のみが活動目的となるとは思ってもみなかった。彼女たちの生涯を辿ってみると、1848年セネカフォールズで開かれた婦人の権利のための第一回集会で幕明けし1920年婦人投票権獲得に至る狭い意味でとらえたアメリカの女権運動からみれば、彼女たちはその枠外にいたといえるかもしれない。彼女たちは女性が政治に参加する権利について言及はしているが、投票権は要求しなかった。彼女たちの念頭にあったのは女性が請願する権利であった。彼女たちは、セネカフォールズ集会で中心指導者ではなかった。1850年アンジェリナは第2回目の婦人の権利のための集会において副会長に選ばれたが出席せず、大会に手紙を送っただけであった。

しかし、グリムケ姉妹が同時代の女権運動家に強い影響を与えたのはまぎれもない事実である。セネカフォールズ大会の中心人物ルクレチア・モットはサラの著作について、メアリー・ウルストンクラフトの『婦人の権利の擁護』(*Vindication of the Rights of Woman*)について、女権に関するもっとも重要な本であると評価した⁷¹。そのモットが女権について述べる時は、グリムケ姉妹の女権についての概念、および言葉使いをそのまま引用することが多かった。19世紀末、エリザベス・ケイディー・スタントンはサラの女性に関する聖書解釈に基づいて、『女性聖書』(*Woman's Bible*)を書いている⁷²。

グリムケ姉妹の男女が同じ権利と義務を持ち、同じ活動領域を持つという女権論は、神がそれ

らを定めたという宗教的基盤に基づいており、19世紀的制約はあるが、その男女同権論は現代のニューフェミニストたちの主張と合通するものを持っているということは、とくに強調する必要がある。現在、人間の権利要求の一部として女権運動を看做し、男女に関する意識革命がアメリカで進行しているが、「権利と義務は性に基づくものではなく、私たちの生活との関連から生ずる……男女は……人間としてまったく同じ自由を持ち」「それぞれの義務は環境によって異なる……義務と責任は、男として、女として生ずるのではない。」という、いかにも現代的な意味あいを持つ言葉が、今から150年前にもうすでにグリムケ姉妹によって発せられていたのである⁶⁰。奴隷制廃止論者として有名なグリムケ姉妹が150年前に、今日まで色あせない女権理論をすでに確立していたということは、アメリカのフェミニズム運動の歴史の中で高く評価してよいことである。

注

- (1) Ellen Carol DuBois, *Feminism and Suffrage* (Cornell University Press, 1978); Barbara J. Harris, *Beyond Her Sphere* (Greenwood Press, 1978); Blanche Glassman Hersh, *The Slavery of Sex* (University of Illinois Press, 1978); 拙稿「女性アポリショニスト—最近の研究動向：1959—1978」『英米文学研究』14号(1979) pp. 69-84 参照。
- (2) 奴隷制廃止論者としてのグリムケ姉妹の分析は拙稿「グリムケ姉妹—サザンベルのアポリショニスト」『アメリカ研究』16号(1982) pp. 154-173 参照。
- (3) Angelina to Jane Smith, Aug. 10, 1837, quoted in Catherine D. Lumpkin, *The Emancipation of Angelina Grimké* (University of North Carolina Press, 1974), p. 106.
- (4) Lumpkin, p. 107; Alma Lutz, *Crusade for Freedom: Women of Anti-Slavery Movement* (Beacon Press, 1968), pp. 105-106.
- (5) Catherine Birney, *The Grimké Sisters: Sarah and Angelina Grimké, the First Women Advocates of Abolition and Woman's Rights* (Lee and Shepard, 1885), p. 180.
- (6) Angelina, *An Appeal to the Women of the Nominally Free States, Issued by an Anti-Slavery Convention of American Women & Held by Adjournment from the 9th to the 12th of May* ([1838], Books for Library Press, 1971), pp. 5, 14, 36.
- (7) *Ibid.*, pp. 11-14.
- (8) Catherine E. Beecher, *An Essay on Slavery and Abolitionism, with reference to the duty of American females* ([1837], Books for Library Press, 1971), pp. 5, 14, 36.
- (9) *Ibid.*, pp. 98-105.
- (10) *Ibid.*, pp. 104-105.
- (11) *Ibid.*, pp. 101-103.
- (12) Carroll Smith Rosenberg, "Beauty, the Beast and the Militant Woman: A Case Study in Sex Roles and Social Stress in Jacksonian America," *American Quarterly*, XXIII (1971), pp. 581-583.
- (13) "Pastoral Letter of the General Association of Massachusetts to the Congregational Churches under their care," quoted in Gerda Lerner, *The Grimké Sisters from South Carolina: Pioneers for Woman's Rights and Abolition* (Houghton Mifflin, 1967), p. 189.
- (14) Lumpkin, pp. 112-113.

- (15) "Pastoral Letter," quoted in *Up From The Pedestal: Selected Writings in the History of American Feminism*, ed. Aileen S. Kraditor (New York Times Book Company, 1968), p. 51.
- (16) *The Liberator*, Aug. 18, 1837.
- (17) Angelina to Henry C. Wright, Aug. 12, 1837, in *Letters of Theodore Dwight Weld, Angelina Grimké Weld and Sarah Grimké: 1822-1844*, eds. Gilbert H. Barnes and Dwight W. Dumond ([1934], Peter Smith, 1965), I, 420. 以下 *Letters* と記す。
- (18) Weld to Angelina and Sarah, July 22, 1837, in *Letters*, I, 420.
- (19) John Greenleaf Whittier to Sarah and Angelina, Aug. 8, 1837, in *Letters*, I 423-424.
- (20) Weld to Sarah and Angelina, Aug. 15, 1837, in *Letters*, I, 425.
- (21) Weld to Sarah and Angelina, Aug. 15, May 22, 1837, in *Letters*, I, 423-424.
- (22) Weld to Sarah and Angelina, Aug. 15, 1837, in *Letters*, I, 427.
- (23) Sarah and Angelina to Wright, Aug. 27, 1837, in *Letters*, I, 438. しかし、ギャリソンが女権を主張し支持したのは、理論上、あるいは便宜上のことにすぎなかったのではないか、という見方もある。彼が実践面で女性が社会の中で男性に混って活躍することを快く許していたかどうかは、歴史家の間でいまだに論議を呼んでいる問題である。ギャリソンと女性問題については拙稿「女性アポリシヨニスト」 pp. 76-78; Gilbert H. Barnes, *The Antislavery Impulse 1830-1844* (Harcourt, Barce & World, Inc., 1933); Dwight L. Dumond, *Antislavery: The Crusade For Freedom in America* (W. W. Norton, 1961); Aileen Kraditor, *Means and Ends in American Abolitionism: Garrison and His Critics on Strategy and Tactics, 1834-1850* (Pantheon Books, 1967)
- (24) Angelina to Weld, Aug. 12, 1837, in *Letters*, I, 415.
- (25) Angelina to Weld, Aug. 27, 1837, in *Letters*, I, 441.
- (26) Birney, p. 198.
- (27) Angelina, *Letters to Catherine Beecher, In Reply to an Essay on Slavery and Abolitionism, Addressed to A. E. Grimké. Revised by the Author* ([1838], Arno Press, 1969), pp. 103, 108, 115.
- (28) *Ibid.*, p. 118.
- (29) *Ibid.*, p. 109.
- (30) *Ibid.*, pp. 119, 112.
- (31) *Ibid.*, p. 119.
- (32) *Ibid.*, p. 122.
- (33) Sarah, *Letters on the Equality of the sexes and the Condition of woman: Addressed to Mary S. Parker, President of the Boston Female Anti-Slavery Society* (Isaac Knapp, 1838), pp. 5, 16, 17.
- (34) *Ibid.*, pp. 14-15.
- (35) *Ibid.*, pp. 24-25.
- (36) *Ibid.*, p. 24.
- (37) *Ibid.*, p. 10.
- (38) *Ibid.*, pp. 46-48, 54-55.
- (39) *Ibid.*, pp. 56-65.
- (40) *Ibid.*, pp. 116, 119.
- (41) *Ibid.*, p. 123.
- (42) Lumpkin, p. 119.
- (43) Sarah and Angelina to Henry C. wright, Aug. 12, 1837, in *Letters*, I, 419.

- (44) Angelina to Weld, Aug. 12, 1837, in *Letters* I, 415.
- (45) *Ibid.*, 415.
- (46) Angelina to Weld and John Greenleaf Whittier, Aug. 20, 1837, in *Letters*, I, 428-430; Sarah and Angelina to Weld, Sept. 20, 1837, in *Letters*, I, 450.
- (47) Birney, p. 181.
- (48) Judith Nies, *Seven Women: Portraits from American Political Tradition* (Viking Press, 1977), p. 24; Lutz, p. 119.
- (49) Nies, p. 24.
- (50) Angelina to Amos A. Phelps, Sept. 2, 1837, quoted in Hersh, pp. 204-205; Sarah, *Letters on the Equality*, p. 60.